

# シンセキのオバサンのような立ち位置

もりあきこ  
森 明子  
民博 民族文化研究部



ベビーシッターをしてみました  
髪を作ってあげる—お願いします

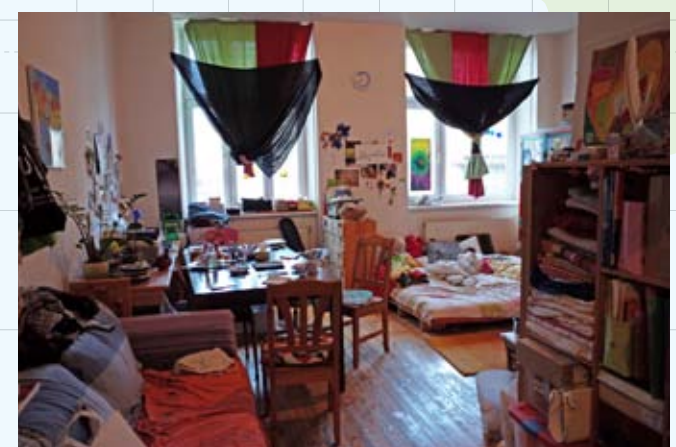
ベビーシッターは、現代家族にとって心強い助っ人である。  
ウィーンで長年シッターをしている師匠のもとで見習いをしてみた。

## 子どもを預かる

カロンは五歳の女の子、弟のコニは一歳半である。両親が医者仲間の舞踏会に出るため、一晩、二人を預かることになった。師匠の住まいに慣れている二人は、すぐにのびのびと遊び始めた。

リビングの古くて大きなマットレスは、師匠のベッドでもあるのだが、預けられた子どもたちの遊び場でもある。カロンは、窓枠によじのぼって、マットレスめがけて飛び降りる遊びが気に入ったらしい。そろそろやめさせようか、と動きかけたわたしを師匠は制止して、彼女が飽きるまでさせておいた。

カロンの食事は、献立の交渉からはじまった。マカロニをゆでるような簡単なものだが、彼女のリクエストとおりの食材がすべてそろっているわけではない。師匠が、それに近いものをいくつか提案し、合意にこぎつけてから作りはじめる。やっとできたものだが、彼女が食べるのは「口が三口くらいである。それでも食事は食事、これを終えなければ、デザートにはいかせない。子どもたちにとって、デザートはいつも食事の最高の楽しみだ。多くの子どもが、デザートを食べるために、その前の主食を我慢して食べる。しかし、この日のカロンは失望することになった。師匠のオーガニックチョコレートは、彼女にとって「甘くなかった」からだ。



自宅のリビングルームでも、子どもを預かる



保育園から迎えて家へ、途中で「ブラックベリーを買って!」



オーストリア、ウィーン

彼女の大好物は甘いものである。毎食、毎食間、チョコレートを食べたという。「そんなに食べると太るよ」と、思わずわたしの口がすべった。彼女は本気になって気分を書し、師匠がすばやくとりなした。デリカシーのない冗談であったようだ。  
寝る体制にはいつてから、コニは約二時間、大声で泣き続けた。そのすぐ隣で、カロンは絵本に聞き入る。師匠は泣き喚くコニを無視して、二時間間声をはりあげて、絵本を読み続けた。わたしは、この三人の強靱な体力と集中力にすっかり気圧された。師匠によると、二人の両親は、一人ずつ専従で、毎晩寝かしつけているのだという。「だから、カロンとコニは一緒に寝ることに慣れていない。でも、わたしのところでは、そんなことはしない。ぴしゃりと言った。」

## シッターマママイトを作る

子どもが、ほかの子どもと一緒にすくすくするのはよいことだ、というのが師匠の考えである。子ども同士、親同士、一緒にすくすくは、学びことは多く、能力も引きだされる。  
熟練のベビーシッターである師匠は、一〇軒以上の家庭

の子どもを世話している。別々のツテをたどってきた子どもたちであるが、師匠は、彼らをできるだけ引き合わせようとする。また、自分がいつ誰の世話をしているかも、積極的に知らせる。  
これによって親たちは、互いを少なからず知っていて、いつ誰がシッターを頼んでいるかも、おおよそ把握している。このことは、杓子定規の契約だけでは対応しきれない子どもの世話において、柔軟に臨機応変の対応をするために、重要な素地をなしている。  
予定外の事態に遭遇して、急にシッターを頼みたい、ということは、いつでも起こりうる。師匠は、そういう対応ができることを重視しているようだ。ほかの親たちに事情を説明し、一緒にシッターすることや、お迎えの時間と場所の調整に協力してもらう。口頭から、両親の了解のうえで、数人の子どもの一緒に世話することは、臨機応変の対応とも適合的である。



2児のママから「遊びに来て」の電話で、師匠(中央)は、1歳児と訪問した

子どもたちの両親にとって、師匠は信頼できる子育ての助っ人であると同時に、友人関係の一角をなしているようでもある。趣味や健康、休暇や税金の相談など、さまざまな情報を交換し、助力もしている。つきあいの主要舞台はリビングルームで、家族ではないが、家庭内へ入り込む回路をもっている。子どもの視線から見れば、シンセキのオバサンのような存在かもしれない。このつきあいは、親と子の二世帯を巻き込んで展開していく。